

心の輪を広げる体験作文 一般部門 最優秀賞

「障害者とともに歩む社会を形成する」

しづや あすか
渋谷 飛鳥

私は、障害のある人のことを、あまり意識していませんでしたが、最近の社会や暮らしの実情を見て、さまざまなことを実感するようになりました。

そう思うようになったきっかけは、私が大学四年生の時でした。ちょうどその時期に、就職活動をしていた私は、さまざまな会社や業種の選考を受けていたのですが、内定も出ず、周囲の人は内定していて、気持ちもあせりだしました。同じ時期に突然体調を崩しました。身体が痺れたようになり、声も出せず、意識が朦朧になったのです。ちょうど自宅にいるときで、家族もいました。寝ているときにそれが起こり、家族が異変に気付いてくれました。五分でそれは治まりましたが自分でもよく分からない状況になりました。病院の先生からは、「てんかん」と診断されました。そう診断されたときは、自分でも正直「驚き」と「不安」しか頭にありませんでした。私自身は、そういう症状が出たならまずは克服していくしかないと思いました。このような症状を持つのは私だけではなく、世の中にはたくさんいるということをネットで知りました。それまでは、そのことをあまり考えていませんでした。色んな人の体験談を読んだりして、「自分も負けてはダメなんだ。」と強く思うようになったのです。

大学卒業から一年は、アルバイト生活で収入を得て、その後は派

遣社員として、今年三月まで仕事をしていました。生活習慣も変わり、毎日が充実していましたが、てんかんの症状は時々起きやすく、それにうまく対処することが一番の壁でした。病院の脳神経内科にも、二か月に一回通うようになり、薬の服用もこの頃から始め、現在も続けています。

今年の三月に、会社都合を理由に退職し、転職活動に切り替えました。そんな時に、母親から障害者就労移行支援事業所を紹介されました。最初は戸惑いもありましたが「様々な障害を持つ人が利用して、就職していった。」という実績があったり、「人事部等で活躍経験のあるスタッフが親身になってくれる」といった声が多数あることを知り、今年の六月から通い始めました。この時、自分は「病気を克服できるかもしれない」と思いました。

緊張と不安のなか、迎えた通所初日、やりなれたこともあるなか、そうでないものの作業に追われ、頭が回りません。そのせいで症状がでたらどうしようとも思いました。そのとき、ひと声かけてくれたのが、その施設のスタッフの方でした。最初のころは何度か面談の機会も設けてくれて、自分のことをよく理解してもらえました。

通所から一か月、二か月経つにつれ、施設の雰囲気にも慣れてきました。ここで感じたことがありました。それは、「外面上は普通の人だけど、障害がある。それでも社会に溶け込めるように努力している。」ということでした。今、「コロナの影響もあって、あまり人とかかわる作業が少ないのですが、周りの人をよく観察していると、社会のなかの一員として活躍するために頑張っていることがわかりました。車いすで通所している方もいたり、作業中に人と違う行動をとってる人もいます。普通の人ならば、この行動に対していら

らしたり、それがエスカレートすると、おそらく忘れもしない、四年前の障害者事件が再発する可能性もあるのではないでしょうか。私は、相模原市の在住者で、しかも、事件現場の近くに住んでいます。今の自分なら、あの事件の衝撃は、障害者に対する見方をより深く考えさせられました。

障害者であってもなくても、仲間意識を持つという気持ちが大事だと思います。将来、目指す道が違ってても、それに向かって頑張ることは、当たり前のことかもしれませんが、私のように、障害のある人はどこかしらでハンデがあったり、障害のあることを他人が理解していなければ、仲間外れにだってされてしまうことがあります。今や、障害のありなし関係なく、互いに認め合って暮らしているという考え方が、必要になってきているのではないだろうか。しかし、障害の範囲の目安というのが、明確ではなかったり、認め合おうという努力が定着せずに、解決に向けた道は程遠いことが課題だと私は思います。

今、障害者就労移行支援施設で、再就職に向けて頑張っています。目標は就職だけではありません。他の障害者ともうまく付き合い合っていく、これからの人生が実りあるものになることももちろん考えています。

一人一人が、他人と心を分かち合い、「平等」な社会を形成することが、現代社会において必要ではないでしょうか。